



ひよこだより



都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談

令和4年6月1日 NO. 3

セルフアドボカシー

4月29日の保護者教室で、本校早期教育相談指導員の堀口祐里さんが当事者の立場で生き立ちや現在の保育士の仕事について講演してくださいました。祐里さんはデフファミリー育ちですが、全員が手話で通じ合えるデフファミリーのイメージとは違い、手話が苦手な難聴のお父さんとは口話中心、手話が少しできる難聴のお母さんとは手話と口話、ろう者であるお兄さんとは手話でというように、互いが相手に合わせてコミュニケーション手段を変えているという話をされました。祐里先生は「ちょっとへんてこりんなデフファミリーで育った。」と話されましたが、祐里先生の明るく、朗らかな人柄を見ていると、共通のコミュニケーション手段がない中での苦労はあったものの、互いが伝え合うことを大事にして、温かい家庭の中で育ったのだらうと思いました。

そんな祐里先生の難聴が分かったのは5歳の時で、その後はずっと地域の学校に通って過ごしていたそうです。約70dBの中等度難聴である祐里先生は音声言語で話すことはできるし、ある程度聞こえているので、自分では「聞こえている」と思っていたそうです。しかし、地域の小学校、中学校生活の中では、音声言語が正しく聞き取れないことでのコミュニケーションの齟齬（そご）や「聞こえるのに聞こえない」自分を突き付けられることが多々あり、中学校時代は聞こえないことを周囲に言えず、自分だけ聞こえないことが恥ずかしいという思いで過ごしたそうです。友達や先輩との関係がうまくいかないことも多く、成績も上がらず学校も休みがちだったようですが、中3で同障の仲間と出会い、聞こえないことを前向きに受け止められるようになったとのことでした。高校の入学式では新入生代表挨拶を立候補し、皆の前に出て難聴があることを説明するなど、高校時代は周囲に聞こえないことを堂々伝えられるようになったそうです。その結果、何人かの友達が手話を覚えたいと言ってきたそうで、手話部もできて、手話を教える中で友達も増え、コミュニケーションもスムーズになったとのことでした。祐里先生が、ある程度は聞こえるので他の人と同じように「聞こえる」と思っていた、しかし実際には聴者のように聞こえているわけではなかった…その気付きに至ることは簡単ではないことがよく伝わってきました。聴者の中で聞き誤りや自分だけ情報が入らなかったことで起きるトラブルや困り感といった体験だけではなく、同障の仲間と出会ったことが聞こえない自分を自覚できるきっかけになったことがわかりました。こうした様々な体験を通して思春期に自分と向き合い、自分は何者かを考え、ようやく「自分は聞こえない人間だ。」「自分は難聴者だ。」というアイデンティティー（自己認識）が確立したのだと思います。この自己認識はとても大事で、気付かないまま歳を重ねることは心の発達面で歪（ひずみ）を生じかねません。祐里先生はいい時期にきちんと気付けたのだらうと思います。さらに、この時期に同障の仲間と楽しく過ごし、豊かに語り合えた経験を通して、聞こえない自分を肯定的に捉えることもできるようになったようです。聴者である友人に自分のことをきちんと説明できたのも、このアイデンティティーの確立と同障の仲間との出会いが大きな影響を与えたのだらうと思います。



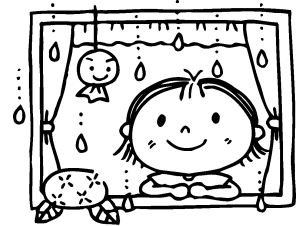
ここ数年「セルフアドボカシー」という言葉をよく耳にするようになりました。これは、『生活上の障がいや困難のある当事者が、自分の利益や欲求、意思、権利を自ら主張し、自分自身、または他者のために権利擁護活動を行うこと（日本学生支援機構より）』と定義されています。知的障がいの方や自身で主張することが難しい場合は、代理人が必要な支援について周囲に発信することも含まれます。それぞれの障害によって、また同じ障がいであっても個々によって周囲に求めたい支援は様々ですから、それを自分で考えて発信しなくてはなりません。今は皆さんのお子さんは乳幼児なので、自分から説明したり周囲に交渉したりすることはできませんが、小学生以上になったら自分で少しずつ自身のことを説明して、どう支援してほしいのかを伝える力を身に付けていきたいもので

す。祐里先生が高校生になった時に、自分の障がいについて周囲に説明したことがまさにこのセルフアドボカシーでした。その結果、自分に必要な支援が得られるようになりました。祐里先生の場合は、手話を使ってくれる人が増えたことで高校生活が楽しいものになりました。おそらく祐里先生が難聴について皆に説明をしていなければ、音声で話しているし、1対1の静かな所では話がよく通じるので、周囲の人は普通に多方向から話しかけ、通じなければなんでちゃんと聞いていないのかな、無視するイヤな人…のように誤解したかもしれません。やはり、自分のことを説明する、そして必要な配慮について求めることは、当事者の利益につながるので必要なことですね。祐里先生はとても大事なことを教えて下さいました。

では、どうしたらこうしたセルフアドボカシーは身に付けることができるのでしょうか。

●ありのままのわが子を受け止める。

親御さんがわが子の難聴を卑下し、聞こえる子供のようになってほしいという思いで接すると、子供は聞こえていた方が良かったと、聞こえない自分を肯定的に受け止めることが難しくなると思います。かつて、聞こえるお子さんのように話す、発音することが一番大事という価値観で教育を受けていた時代の当事者は、どんなに頑張っても聴者のようにになれるわけでもなく、またきれいに話せるようになって、自分は音声での話が全てわかるわけではない…そんな教育、子育ての在り方に苦しさを味わった声がたくさん挙がりました。やはりきちんとわかることを大切に、親御さんが手話を使って子育てする姿勢が、聞こえない自分はあるのまま受け入れられている、聞こえない自分をいいなと思えるメッセージとなり、自己肯定感を育む源になると思います。自己肯定感があれば、周囲に自分のことを堂々説明できると思います。



●親御さんも周囲に聞こえないことについてあっけらかんと説明する。

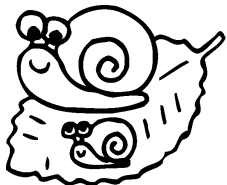
基礎講座でもお話してきましたが、親御さんの背中を見て子供たちは聞こえないことがマイナスではないと受け止めることができます。「うちの子はきこえなくてね。だから～の時は宜しくお願いします。」「うちの子は難聴があって声だけでペラペラ言ってもわからないので、私手話を学んでいるんですよ。」そんなことをわが子の前で周囲の人に説明する姿を見せてほしいと思います。子供は親御さんを真似て、周囲に自分のことを説明できるようになることでしょう。

●同障の仲間、ロールモデルと出会う機会を作る。

聴者の中で不便であったり不甲斐ない経験をしたりしても、対等に悩みを語り合える仲間がいれば、また明日頑張ろうと前向きな気持ちになることができます。また、同じ聞こえない先輩が好きなことを見つけてポジティブに生きる姿や社会で活躍する姿を見たり、語り合ったりする機会があれば、そこから貴重な学びを得ることができるでしょう。こうした出会いや体験は聞こえない自分の認識、自己肯定感につながります。こうしたチャンスをできれば幼い時から作ることを子育ての中で配慮できたらいいと思います。

●難聴、聴覚障害についての知識をもつ。

小学生になったら、自分の障がいがどのような障がいか、騒音や距離、相手の話し方によって聞こえ方が違うことや手話や指文字の意義、自分の聞こえ、補聴器や人工内耳の効果や限界など、聴覚に関する知識をきちんともつことが大事です。こうした知識があれば、周囲に自分の聞こえやコミュニケーションのコツについて具体的に説明できるのです。当事者の立場で周囲に自分のことが説明できるようになると、周囲から必要な支援が得られるでしょう。



幼い頃からきこえないことをありのまま受け止めて、わが子に歩み寄る子育てをする親御さんの姿勢や価値観があれば、子供たちは自分が聞こえているのか、聞こえていないのかわからない…そんな悩みを抱えずに済むのではないのでしょうか。自分は手話が必要な人間で、音声だけではとてもじゃないけれども100%わかるわけではない、そんな自覚を早くからもつことで、適切な時期に自己認識、アイデンティティーが確立するはずで、それを元に、自分に必要な支援を周囲に求めることができ、QOL（生活の質）が上がると思います。

祐里先生はデフファミリー育ちなので、聞こえないことは当たり前で、肯定的に受け止められてきたのだと思います。聴者の学校で色々困った体験はありましたが、居心地の良い家庭があったからこそ、それを一つ一つ乗り越え、高校生になって堂々と自分のことを説明し、生きやすさ、生活の楽しさを得ることができました。祐里先生から学んだことを活かしていきたいものですね。 (文責 菅原)

